

愛知学院大学人間文化研究所報

中国特務陳果夫の歩みと

民生主義・合作社

菊池一隆

はじめに

従来、私は一九三七年から四五五年に至る抗日戦争時期の中国特務史研究をしてきた。その際、浮上するのが特務の「C・C団」(以下、C・C団)と「藍衣社」であるが、本稿では、C・C団をとりあげる。そして、その思想形成に重要な役割を果たした弟の陳立夫ではなく、研究が相対的に少なく、不明点が多い陳果夫に焦点を合わせる。陳果夫はC・C団の巨頭であると同時に、国民党の大幹部であり、情報活動のみをしていたわけではない。そこで、本稿では、陳果夫の特務活動の本質や特色を多角的視点から構造的に解明するため、傾注していた合作社、及び孫文・三民主義の中の民生主義を強調するなどの実態を押さえておくことにした。なお、本稿は、現在準備中の拙著『中国特務と抗日戦争―C・C団』と『藍衣社―』の一部として挿入する予定であり、研究動向整理などは紙幅の関係から、そちらに譲りたい。

一 陳果夫の略歴と叔父陳其美

まず最初に陳果夫の略歴を示しておくたい。

陳果夫(一八九二―一九五二)は浙江省呉興県生まれ。一九〇七年杭州の陸軍小学入学。叔父陳其美の日本留学と革命活動に大きな影響を受ける。一一年中国同盟会に加入。武昌起義に参加。二七年四・一二クーデターの際、張静江、蔡元培らと共産党弾劾案を提出。南京国民政府が成立すると、中央党務学校創立を決め、総務主任に就任。二八年二月から一〇月まで組織部長代理に就任し、全力で党務整理をおこなない、組織、宣伝、農民、労働者、青年、婦女、海外、商人、軍人の九部門、及び組織、訓練、宣伝、民衆運動委員会の四部門に整理再編し、強化するとともに、各省市党部もこれにならわせた。七月南京に中央放送局(XGOA)を創設し、各地に分局を設立して国民党の宣伝、教育に効果をあげた。さらに一二月上海に中国合作学社を設立し、理事長に就任、合作事業の普及に努めた。三二年「導淮」(淮河の氾濫防止と水路、土地整理計画)委員会代理副委員長、一〇月には江蘇省政府主席に就任し、省保安処に全省地方武装の統一の指

揮、及び各県に保甲制度の実施と戸口調査を命じ、また金庫會計制度を実施し、財政秩序を確立した。三五年中央執行委員、常務委員、中央文化事業計画委員会主任委員、土地専門委員会主任委員等に就任。三八年中央政治学校教育長、三九年軍事委員会委員長侍從室第三処主任に就任するとともに、經濟部合作事業管理局の実権を握った。四〇年中国農民銀行董事、四聯總処農業金融委员会主任委員、四二年組織部長を歴任した。抗戦勝利後の四六年農業教育映画公司董事長。五〇年台湾で中国伝統文化発揚などの反共運動を推進したが、五一年病死(吳相湘『陳果夫の一生』伝記文学出版社、一九七一年。劉紹唐主編『民国人物小伝』第一冊、一九七五年。拙稿「中国国民党における合作社の起点と展開」『孫文研究』第九号、一九八八年など参照)。

このように、辛亥革命に直接参加し、その勝利に貢献している。一九二七年以降は反共の姿勢は明確となった。二八年組織部長代理の就任が特務活動の開始であり、国民党組織機構の整理強化をおこなった(他に特務関連で重視すべきは、三九年軍事委員会委員長侍從室第三処の主任就任、四二年組織部長である)。同年、中央放送局創設が国民党の影響力を高めるためのプロパガンダも開始している。いわば国民党内外での地盤強化、組織化を推進したといえよう。その後、社会・経済両面で力を発揮した。三二年水利と土地整理、とりわけ中国で極めて重要な江蘇省主席に就任すると、地方武装の統一、保甲制度と戸口調査により地方武力と民衆把握を強化し、また地方財政秩序を確立したと称される。また、中国農民銀行、四聯總処との関連もある。他に、中央党務学校、中央政治学校関連からは国民党員養成という側面から着目しておく必要がある。いわば陳果夫は特務面で注目を集めているが、実は多面的な活動をおこなない、各種の実績を有しており、歴史的に位置づける場合、一筋縄で単純な結論を導き出すことは不可能である。ここで私が注目するのは、中国合作学社、国民政府經濟部合作事業管理局など合作社(協同組合)・金融関連の経歴である。これを軸に考察を加えていきたい。

ただし、その前に陳果夫に大きな影響を及ぼしたとされる叔父の陳其美(一八七八―一九一六)の略歴を見ておきたい。陳其美とは果たしていかなる人物なのか。字は「英士」。其美の祖父は郷紳、父(陳果夫の祖父)は商人で浙江省呉興県出身。一九〇三年上海にある生糸問屋の会計見習い。日露戦争前後の民族運動に刺激を受ける。日本留学資金の支援を頼むため、当時、湖南省長沙にいた弟其采(新軍標統(連隊長に相当))に会いに行く。当時、長沙ではアメリカの華僑排斥に抗議する対米ボイコットがおこな

われており、それに参加。一九〇六年日本に私費留学、東京警監学校で警察関係法を学ぶ。中国同盟会加入。寺尾亨（国際法学者）創設の東斌陸軍学校に転学、軍事学を学ぶ。振武学校留学中の蒋介石を説得し、中国同盟会に加入させる。一九〇八年春、孫文の指令で帰国、上海中心の革命活動に入る。一九〇九年、天保旅館を経営し、江浙地帯の革命派の拠点とし、武装蜂起の準備をするが、密告者が出て失敗。辛亥革命時、上海蜂起で青幫、紅幫を参加させることに成功。一〇年『民立報』の発刊に関与、翌年には革命への国際的支援のため、『China Press』創刊に参画した。黄花岗起義の失敗の際、革命派救出に尽力。一一年一〇月武昌蜂起が勃発すると、青幫、商団を組織化して上海蜂起を準備、一月三日上海民軍蜂起を決行、自ら決死隊を率いて武器生産の江南製造局を襲撃し、上海独立の契機をつくる。六日上海軍政府の都督に就任、江浙一帯に勢力を有していた光復会領袖の陶成章を暗殺。一二月青幫など会党を近代的に再編しようと中華国民進会を新設。一三年七月袁世凱打倒の第二革命が起こると、上海討袁軍総司令に就任するが、失敗して日本に亡命した。日本では、孫文による中華革命

の結成に参画し、総務部部長に就任。一五年一〇月上海で反袁世凱闘争に従事し、一二月上海鎮守使の鄭汝成を暗殺。第三革命により護国戦争の開始後、一六年五月袁世凱の指示により暗殺された（笠原十九司「陳其美」、山田辰雄編『近代中国人名辞典』霞山会、一九九五年、

八三〜八四頁参照）。このように、日本留学派であり、警察、軍関係を学ぶ。孫文を全面的に支援し、辛亥革命を成功に導いたとされ、その評価は極めて高い。陳果夫はこうした叔父を信頼し、尊敬していたのであろう。

二 合作社事業推進における陳果夫の役割

中国で最初に合作社（協同組合）提起したのは孫文と考えられる。では、孫文が明確にそれに言及したのはいつか。それはやはり「地方自治開始実行法」（一九一九年）であろう。これには以下のように書かれている。

「地方自治の範囲は一県をもつて充分な区域とする。もし一県にできなければ、数村を連合する。……その志向は民権、民生両主義の実行を目的とする。その段取りは(1)戸口の調査、(2)（自治）機関の設立、(3)地価の確定、(4)道路の修築、(5)荒地の開墾、(6)学校の設立で……以上が自治開始の六事である」とした。その上で、「地方自治団体がおこなわなければならないことは、農業合作、工業合作、交易合作、銀行合作、保険合作などである。……要するに、建議するところの地方自治団体は一つの政治組織であるにとどまらず、また一つの経済組織である」（孫文『地方自治開始実行法』一九一九年、『孫中山叢書』第二冊、一九二七年、九頁、と。このように、地方自治との関連で農業合作社、工業合作社、交易合作社（消費合作社）など各種

合作社に言及し、県レベルでの地方自治、民生主義実現、産業開発、経済基盤確立のために各種合作社を重視したといえる。そして、地方自治団体は「政治組織」と同時に「経済組織」としている点は注目に値する。ただし、ここでは、まだ合作社の具体的組織、構造、内容などが明示されているわけではない。

では、陳果夫はどのような活動を、合作社といかなる関係にあったのか。

(1)一九一四年春からドイツ留学を決意して薛仙舟にドイツ語を習った（実際にはドイツに留学しなかった模様である）が、同時に合作社と革命問題を論じ、かつ研究したという（呉相湘『陳果夫の一生』伝記文学出版社、一九七一年、三〇五頁）。おそらく「階級調和」の初歩的な見解をもつに至ったのではあるまいか。

陳果夫が初めて合作社運動で実際に活動を開始したのは、二〇年一月二日成立の民間団体たる上海合作同志社への参加である（当時、中国初と思われる類似の民間団体には湖南合作期成社、上海職工クラブ、四川成都普益協社、江蘇無錫合作研究社などがあった）。その宗旨は合作主義の研究、合作社の提唱、合作人材養成による合作社の推進であった。寰球中国学生会で成立大会が挙行され、男女社員計四〇人が参加し、章程八カ条を採択した。委員会委員には公選により薛仙舟、程婉珍、陳果夫、邵力子、徐滄水、陳端、陸思安、毛飛、李安の計九人が選ばれた（戚其章『復旦大学底合作運動』『平民周刊増刊』第四九期、一九二

一年五月一日など。『平民』は『上海民日日報』副刊。以下、同じ）。同志社は復旦大学内に暫定的に設置され、関係図書収集による合作図書館の設立、編訳、講演、及び通信指導により、ほとんど知られていない合作社の普及に努めた。また、試験的に各地に合作研究社、信用合作社、消費合作社、生産合作社を設立し、二一年五月第一回大会で社員七〇人に達したにもかかわらず、その後、原因不明であるが、社員が四散してしまったという（寿勉成、鄭厚博『中国合作運動史』正中書局、一九三七年、六二〜六三頁。以下、『運動史』と略称。章有義『中国近代農業史資料』第三輯、三聯書店、一九五七年、六二〜六三頁）。

(2)こうした経過の中で特筆すべきは、民間の合作運動指導者と、第一次国共合作下で国共両党員が協力して合作運動協会を設立したことであろう。これは上海合作同志社の停頓後、陳果夫と彼の叔父陳謙士らが提唱し、指導して設立したものである。発起人会議は、二四年七月二六日上海で開催され、発起人は陳果夫、陳謙士、葉楚傖、邵力子、張廷瀛、汪精衛、許紹棣、毛飛、胡漢民、王世穎、毛沢東、戴季陶ら三〇人であったという（『合作運動協会発起人会議』『上海民日報』一九二四年七月二七日など）。このように、国民党員としては戴季陶、陳果夫、邵力子はもちろん、汪精衛や胡漢民らも名を連ねていることは興味深い。民間の合作運動指導者としては張廷瀛、王世穎、毛飛らである。そして、中国共産党（以下、中共と略称）の毛沢東の名

もあり、注目される。会議では、①準備委員会を組織し、準備委員には葉楚傖、毛沢東、陳果夫、張廷瀾、許紹楙の五人、候補委員には邵力子らを選んだ。②会員募集は発起人の三〇人が各自それぞれおこなう。③準備費は暫定的に五〇元とし、発起人の自由献金とした。そして、④会員が一〇〇名になった段階で成立大会を開催するなどを決めた(「合作運動協会発起人会議」『上海民国日報』一九二四年七月二七日など)。八月上海で中国合作運動協会が成立し、その宗旨は上海合作同志社と同じく、合作主義研究、合作人材育成、合作事業促進とした。ただ、合作運動協会も経常的な活動はしなかった模様である。かくして、国民党の合作社組織化は大きな一歩を踏み出したが、合作社単独で組織される形をとらず、例えば農民協会に付属し、農民生活を改善し、その経済基盤を担う目的で一つの構成要素とする試みがおこなわれた。したがって、合作社数という形で統計数字としては現れない。

(3) 二八年一月二月上海で陳果夫指導で合作同志社と平民学社の旧社員を基礎に中国合作学社を組織し、自ら理事長に就任した。二九年夏、国民党は中央政治学校を成立させ、大学部を設け、行政、法律、財政、社会経済、教育、外交各系を設置した後、地政、合作、計政、新聞の四学院を増設した。蔣介石が校長であったが、陳果夫が実権を握っていた。

(4) 陳果夫は三三年から五年間、南京国民政府下で最も合作事業が発展している江蘇省主席に就任している。この時期、

陳は地方合作実務を監督、指導し、合作事業方面の重要措置をおこなった。例えば、郷鎮合作社制を推進したが、これは中国における県各級合作制度の嚆矢といえるものであった。また、丹陽合作実験区を設立、光福合作実験区を拡大して各地合作事業の模範としたり、各種の農業特産運銷合作社を運営した。巨額の資金を支出している。

(5) 三五年合作社法発布のために、国民党中央政治会議が「合作社立法原則」準備の際、主催者であり、かつ合作社法原則の原案審議責任者であった。

(6) 陳果夫は江蘇省建設庁江蘇医政学院と江蘇省農民銀行が合同で江蘇省人保険合作社の創設を準備したが、これは三七年盧溝橋事件の勃発により頓挫してしまつた。事変後、淮河小麦貸付により軍糧、民食を増産させた。また、各行政督察專員公署に合作指導員を置き、後には江蘇省合作事業協会を創設した。

(7) 三九年經濟部に合作事業管理局が設けられ、中国工業合作運動だけは当初除外が、それ以外の全国合作事業を推進、管理し、かつその下部機関として各省には合作事業管理処、県市には合作指導室が設置され、各種合作社を主管した。管理局長は寿勉成で、その実権を陳果夫らC・C団が握っていた。

(8) 合作事業管理局の成立後、内の合作事業強化、対外的には中国合作界を代表して国際活動に従事する社会团体として中国合作事業協会を創設した。その名誉会長が陳果夫である。なお、名誉副会長は孔祥熙、戴季陶、邵力子、会長は寿勉成である。

(9) 四六年一月設立の中央合作金庫理事長に陳果夫が就任した。同時期、陳果夫の建議で国民党は中央合作指導委員会を設立したが、この時は陳立夫が主任委員、陳果夫、谷正綱、王世頌、寿勉成が委員である。なお、陳果夫は民衆への教育、宣伝を特に重視し、「文字不如口述」、「口述不如電影和歌曲」との考えから、自ら「合作歌」、「合作行進曲」、「合作工人員歌」を作ったり、中国電影公司を指導して合作映画を撮らせたりもした(寿勉成「陳果夫与国民党的合作運動」『文史資料選輯』第八〇輯、一九八二年二月。陳松岩「中国合作事業發展史」上冊、台湾商務印書館、一九八三年、七七〜七八、八〇、八四頁など参照)。このように、陳果夫は合作社の本流を歩んでおり、いわば国民政府・国民党の合作畑の人物であった。第一次国共合作下の合作運動協会などを例外とすれば、合作事業として一貫して管理強化を目指していた。

三 陳果夫と民生主義

ここで陳果夫と民生主義との関係を論じたい。そして、彼の思想や行動の中で民生主義と合作社は密接に結びついているからである。

一九二七年四月蔣介石の南京国民政府と汪精衛の武漢国民政府に分裂した。薛仙舟ら民間合作社指導者は国民党左派と中共が構成する武漢国民政府ではなく、おそらく陳果夫との関係もあり、蔣介石の南京国民政府に接近した。そして、南京の国民党との完全な一体化を目指し、合作社理論を三民主義、特に民生主義でとらえ直し、理論化する作業を本格化させた。同年六月薛と陳果夫は南京国民政府の外交方針、建設計画、及び民生主義の実行法などの諸問題を討論した。薛と陳果夫は思想的にも方向性も極めて近い関係にあった。

薛仙舟は「全国合作化方案」を作成し、二七年七月蔣介石と胡漢民に提出した。当然、陳果夫もその内容には異存がなかったとみなせる。方案を要約すれば、以下の通り。

(1) 序言…三民主義は民生主義に帰せられる。そして、資本節制、地権平均が民生主義を実現する二大政策である。民生主義を最も根本からおこなうためには、合作社を用いる以外ない。国家権力によって大規模な計画を立て、全国の合作化を促進し、全国の「合作共和(民主)(Co-operative Democracy)」を實行し、世界に唱えなければならぬ。

(2) 全国合作社組織法案…大規模な全国合作化のためには当然一つの全国合作社を持たねばならない。その工作はまず訓練、すなわち合作訓練院を重視する。次いで実施することは経済改造、換言すれば「合作共和」の経済面での合作事業のために実際の援助をおこなう。すなわち、全国合作銀行を重視することである。

(3) 合作訓練院組織大綱…これは全国合作社の根本であり、軍隊を訓練する精神を用いて社員を訓練し、それを経て党務に就ける。すなわち、合作訓練院は同時

に国民党員の基本的訓練所である。訓練
 工人は人格、主義、技術の三種に分かれ
 る。期限は学習三年、合作社実践三年に
 分ける。かくして、社会の合作事業、国
 営の経済事業、政府、党務などの服務人
 材を獲得できるようにする。

(4) 全国合作銀行大綱…目的は合作事業
 を援助し、労働事業を援助し、小営業を
 援助するとともに、信用合作社の中央調
 整機関とすることにある(伍玉璋『中国
 合作運動小史』一九二九年、一二〜一三
 頁)。

いわば薛仙舟は合作社を「国家権力」
 による大規模計画の一部、すなわち国家
 資本の一部として機能する道を開き、か
 つ合作訓練院を「軍隊を訓練する精神」
 で実施する「国民党員の基本的訓練所」
 とまで言い切っている。

薛仙舟はこの法案提出後の八月、中央
 党務学校で合作事業の講義をおこなった
 り、積極的に活動した。王世穎によれば、
 薛仙舟は資本主義に強く反対し、同時に
 階級闘争、階級独裁にも賛成しなかつ
 た。そして、「ただ合作主義があつて、
 初めて資本主義を防止でき、ただ合作主
 義があつて初めて共産主義を打倒でき
 る。合作運動があつて初めて社会革命を
 実現できる」(王世穎「薛仙舟先生」

(三二)、『合作』第八期、一九二八年六月
 一四日。なお、『合作』は『上海民国日報』
 副刊。以下同じ)、と力説していたという。

換言すれば、資本主義を否定し、返す
 刀で階級闘争を否定し、その中間の第三
 の道を目指す。こうした主張は一般的
 に「社会改良」と称されることも多いが、

薛仙舟自身は局部的な「社会改良」に反
 対し、大規模な合作主義提唱によって経
 済改造をおこなう徹底的な「社会革命」
 を主張していたとし(王世穎、同前「薛
 仙舟先生」(三三)、自らを決して「改良家」
 とは認めていなかった。なお、『全国合
 作化方案』は、八月蒋介石が下野し、政
 局が緊張したこと、胡漢民は政務で多
 忙、及び財政困難などの理由も絡まり、
 棚上げされてしまった。その上、九月薛
 仙舟自身が急逝してしまった。かくし
 て、国民党による合作社推進は短期間頓
 挫を余儀なくされた。

しかし、陳果夫の階級闘争防止、階級
 協調を骨子とした従来からの蒋介石への
 進言もあり、約半年後の二八年二月四中
 全会上、蒋介石、戴季陶、李煜瀛(石曾)、
 張人傑連名で「合作事業推進議案」を提
 出した。国民党はかつて二五減租や苛捐
 雑税の撤廃を主張してきたが、党の体質
 上、土地革命にまで進むことが困難なこ
 とを知り、その代替策として農村金融面
 から農村再建を目指した。そして、鄉村
 レベルで特に信用金合作社を中心とする各
 種合作社、省などのレベルでの農民銀行
 問題に積極的に取り組むようになってき
 たことを意味する(日本興行銀行調査部

『現在支那に於ける合作社の意義と特質』
 一九四二年、三五頁参照)。こうした状
 況下で、孫文の「遺教」が声高にとりあ
 げられ始め、合作社と民生主義との関
 連、合作社の「調和」的側面が強調され
 ていくことになる。

また、二八年四月中央第四次執監會議
 における「合作運動委員会原文」の中で、

蒋介石、陳果夫らは次のように言う。
 我々は総理(孫文)の民生主義に基づ
 き、必ず社会国家の建設は完全に「民生」

の基礎の上に樹立すべきものと考え、
 民生問題が解決しないならば、いかなる
 理想的計画も空論となる。……いかに
 資本節制と地権平均を実現するかの詳細
 方案は経済設計方面に属し、将来の中央
 経済設計委員会が計画に責任を負わねば
 ならない。……ただ一つの経済運動は
 非常に重要である。……この経済運動
 とは、すなわち合作運動である。……
 「農工(農民・労働者)運動」、「民衆運

動」は本党のスローガンである。……
 ただ残念なことに従来中国共産党に掌握
 され、……破壊面の運動となつてしま
 った。……しかし、合作運動は最も穩
 当で、最も適切で、民生主義に最も適し
 た一つの重要方法である。本党は全民の
 利益を図る党であり、合作運動は全民の
 利益を図る運動である。そこで、本党は
 特に合作運動を提唱しなければならな
 い。本党は特に農労に利益を図る党であ
 り、合作運動は特に農労に利益を図る運
 動である。そこで、本党は特に合作運動
 を提唱しなければならない。具体的に以
 下の二つを提唱する。①中央は「(中央)

経済設計委員会」の下に「合作運動委員
 会」を設立し、専ら合作運動の研究、宣
 伝、提唱、及び指導の職務を担わせる。
 ②中央は合作運動の宣伝費を毎年少なく
 とも五萬元とし、欧文協同組合書籍を購
 入して、その中文訳に用いる(陳果夫、
 李煜瀛、張人傑、蔣中正「中央第四次執
 監會議・合作運動委員会建議案原文」

『合作』第二期、一九二八年四月五日)、
 と。

つまり孫文の民生主義から説き起こ
 し、これを実現するための手段として合
 作社を重視し、かつ中共による「農工運
 動」、「民衆運動」を阻止、代替するもの
 として合作運動を提唱していることがわ
 かる。そして、合作運動委員会設立や宣
 伝費五萬元の使途など、具体的に提案さ
 れており、本格的展開の一手前まで来
 ていることが看取できよう。その他、伍
 玉璋も恐慌防止における合作社の意義を
 論じながら、同時に孫文「地方自治開始
 実行法」を引用し、地方自治の早期実現
 のために合作社を積極的に用いることを
 主張していた(伍玉璋「合作社与恐慌預
 防」『合作』第一〇期、一九二八年六月
 二八日)。

二八年七月頃、「中国合作運動協會」
 が成立した。これは陳果夫が積極的にあ
 ったことから、前述した第一次国共合作
 下に設立された同名の中国合作運動協會
 (二四年八月成立)の基礎を利用し、再
 編したものと考えられる。ただし、以前
 のものは国共両党員を包括しながら民間
 運動団体の色彩も強かった。新設の団体
 は中共党員を完全に除外し、協会員に国
 民党籍を有することを義務づけるなど、
 国民党の外郭団体、もしくは国民党と一
 体化した団体であるという点に決定的な
 違いがある。その成立宣言では、孫文の
 「民生主義のために革命をする。もし民
 生主義を必要としないならば、革命も必
 要ない」を引用した上で、「合作制度は
 経済組織を改造する上で科学精神を有し

ていくことになる。

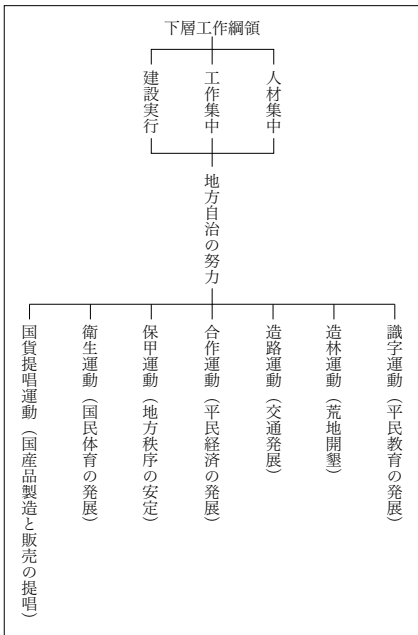
ており、吾党同志はその推進に努力し、実現を目指すべきである。……本会の同志は皆、党籍に属し、深く合作制度を民生主義の実行法に合わせ、宣伝を拡大し、実施の可能性を追求する」(中国合作運動協会(成立)宣言(統)、一九二八年七月、『合作』第二期、一九二八年九月二〇日)、とした。このように、孫文の言葉の引用が急激に増え、その関連で合作社が語られ、その価値を高め、普遍性をもたせた。すなわち、合作運動を国民政府、国民党の運動として推進させる上で、大きな役割を果たしつつあった。

二八年八月に陳果夫は「中国合作運動協会」の名義で「合作運動提唱案」を中央執行委員会第五次全体会に提起した。①中央は合作訓練院を設立、②民衆訓練委員会の下に合作運動委員会を設置、③合作同志を選抜して海外協同組合事業の視察に派遣、④政府に合作法頒布を求め、⑤全国学校での合作課程重視を訓令するの五項目からなっており、関係各機関に分かれて動き出し、その意義は極めて大きいものであったとされる(寿勉成、鄭厚博、前掲書、一〇八頁。陳松岩『中国合作事業発展史』上冊、台湾商務印書館、一九八三年、一五〇頁参照)。

二八年一〇月二五日に南京国民政府が武漢国民政府を吸収合体した。同日、国民党中央第一七九次常会が開催された。その会議で「地方自治」確立を目指す『下級党部工作綱領』が採択され、その中で合作運動をとりあげたのである。当然、これは孫文の「地方自治開始実行法」

を国民政府なりに実現を目指したものとみなせる。同綱領は二日後の一〇月二七日に中央執行委員会がすぐさま各級党部に通令し、施行させた。かくして、このことは図の如く、合作運動が中国の基礎を形成する「七項運動」(識字、造林、造路、合作、保甲、衛生、国産品提唱の各運動)で七本柱の重要な一本として認定されたことを意味する。その結果、国民政府の合作事業は江蘇省を中心に本格的に展開され(蔣建白「十年来的中国社会教育」『抗戦前十年之中国』一九六五年。章元善「合作運動之現状及其与乡村建設之關係」『天津大公報』一九三四年一月二二日など)、一九三〇年代の全国各省(中共のソビエト区では独自に合作社が展開していたので、これを除く)を巻き込み、農村信用合作社を中心に圧倒的發展を遂げることになるのである。例えば、三五年には、全国合作社数は二万六二四社(内、江蘇省は四〇七七社)

図 「下級党部工作綱領」 (1928年10月25日)



出展：蔣建石「十年来的社会教育」『抗戦前十年之中国』1965年など参照。なお、「国貨提唱運動」は後の188次常会で組み込まれ、これで「七項運動」すべてが出揃ったことになる。

おわりに

以上、中国特務史研究を深化させるため、陳果夫の特務以外の活動に焦点を絞り論じてきた。判明したことは以下の通り。

第一に、陳果夫は早期から一貫して合作社を支持し、それを梃子に中国の社会経済基盤の育成を目指してきた。その契機は薛仙舟との関係であろう。彼はドイツ留学を目指しており、薛仙舟からドイツ語を学んでいた。その時、同時に薛仙舟から合作社(協同組合)に関する多くのことを自然に学んだと思われる。第一次国共合作下では、中共の毛沢東を包括する形の合作運動協会設立にも参画している。だが、その後は、国民党の政策として反共の手段としても合作社を推進していくことがわかる。

第二に、陳果夫は薛仙舟と共同歩調をとり、資本主義がもたらす極度の貧富の差を否定すると同時に、むしろ中共の推進する農労運動、民衆運動を非難し、階級闘争を破壊的の見なし、階級闘争を防止することに力点を置いた。そして、階級協調する「調和」ある社会経済建設の手段として合作銀行を含む信用合作社など他業種の合作社を支持した。反して労働運動と結びつきやすい工業合作社や左派的傾向を有する可能性のある消費合作社を注意深く避けているようにも見える。このように、合作社全般を支持したのではなく、ある意味で限定的であった。

第三に、陳果夫は、国民党内での支持獲得、勢力拡大のためあつて、孫文の三民主義を掲げた。だが、「民族・民権・民生」の中で民生主義を突出させた。孫文が主張していた合作社による「民権・民生」の内でも民権主義を捨象した。このことは、国民政府、国民党による上からの管理、独裁を容易にすることに繋がった。藍衣社が三民主義の中で民族主義を突出させたのに対し、明確な相違があった。陳果夫は合作制度による教育も重視していたが、それは黨員養成、軍事的訓練を重視した。ただし国民党内でのC・C団勢力の地盤を確固とし、勢力拡大に結びついたとはいえ、おそらく軍事的訓練、軍人養成などはむしろ藍衣社に主に掌握されていたと見て間違いないであろう。

第四に、「地方自治」確立を目指す『下級党部工作綱領』で七項運動の一本柱とされたことで、三〇年代に江蘇省を中心

とする地方的発展を可能にし、各地方で合作社は着々と社会経済基盤を築き上げていった。だが、三七年の日中全面戦争後、日本の侵略により江蘇省中心の合作社業は大きく破壊された。この後、重慶を拠点に戦時首都を樹立した蒋介石・国民政府は、合作社に抗日持久戦のための農業基盤形成の役割を果たさせた。こうした状況下で、第三勢力が中心となり、国共両党の支持を受け、経済面での統一戦線の役割を担った中国工業合作運動は、陳果夫、C・C団の監視、弾圧、再編の対象となった。

技術英語能力検定

上田 恒雄

技術英語とは「Technical English」とか「Technical Writings」のことを指し、言い換えれば「技術系の英語文書の書き方」とも言える。技術系の英語と言うのは、機器の取り扱い説明書、仕様書、設計図面や科学技術論文など、通常ほとんどの人にとっては、あまり見慣れないものばかりである。しかしこれらの文書には実は共通のルールが存在し、それをより正しく理解することが技術英語能力検定における上位級の取得へと繋がるのである。そこで先ずは実際に仕事で使う英語にはどのようなものがあるのかを大きく次の四つに分けて考えてみる。

一、メール、契約書、見積書、新聞や広告など、一般的なビジネス英語(英

検やTOEICで基本的に扱う)
二、同時通訳および通訳案内士(英語力プラス専門知識を持つプロ)
三、映画のセリフや小説などの翻訳(産業翻訳)

四、技術系の文書の翻訳や書き方(工業英語)

英語の基礎という意味では英検やTOEICが必須ではあるが、英検とTOEICですべての英語を網羅することはできない。基礎ができた上で、さらに仕事で活かす専門的な英語を習得するには実際に少なくとも右に挙げた二〜四のカテゴリの知識や技術が求められる。英語ができれば技術文書は簡単だと考えるかもしれないが、それだけでは不十分なのは明らかである。日本人ならだれでも日本語で技術文書を作れるのかと言うのと同じで、英語のネイティブスピーカーでも実は技術文書のルールというのは教わらないとわからないものである。欧米の大学では先に述べた「Technical Writings」のような授業が開講されており、ネイティブスピーカーもそれを受講し勉強しないとといけないのである。

技術英語の特徴は簡潔に言えば、「必要な情報を誤解を与えないように伝える英文」である。例えば映画や小説は、文章やセリフからストーリーのイメージを膨らませることで読み手を楽ませる工夫が求められたりするが、技術英語では読み手の想像力を働かせるわけにはいかない。マニュアルを読んで機械の操作を誤って事故が起きたら大変なことになりかねない。かなり以前にアメリカで裁判

にもなったが、実際に猫を電子レンジに入れてしまうような事故を防ぐ必要がある。つまりマニュアルに書いてなくても「常識的に考えれば」という考えはまったく通用しないのである。技術文書には機能や安全性などの必要な情報を誤解なく提供することが不可欠である。技術に必要なことは真実ではなく事実の積み重ねであり、民生用・産業用にかかわらず、機器が正しく動くのには設計という根拠があり、壊れたことに対しても物理法則に基づく理由が必ずある。それらの機器を混乱なく安全に使えるようにするための技術者の努力がある以上、技術英語では書き手(設計開発側)の情報を正しく伝えることに徹することが肝要である。そのためには技術英語では次に挙げる三つの「C」を理解して絶えず頭に入れておく必要がある。

- 一、Clear: 明確に
- 二、Correct: 正確に
- 三、Concise: 簡潔に

「Clear」は曖昧な表現を避けること
で、例えば「That」や「They」などの代名詞を使うと、何を表しているのか読み手に「想像させる」ことになりかねない。技術文書では文章の流れからそれが何を指し示すかが明らかでも省略しないことが大切である。同様に受動態は遠回しな表現になりがちなので、できるだけ能動態で書くことが望まれる。他にも命令形の使用も有効である。

「Correct」は本当のことを書かないといけないということである。この三つの「C」の中では一番重要な事項である。

「Concise」は冗長な表現を避けることで、同じ意味の表現であれば、単語数は一語でも減らすべきであるというのが工業英語の考え方である。例えば「come out (〜)という結果を生じる」は「result or causeを動詞として使えば単語数を減らして、さらに意味を強く伝えることができる。他には、一文を一八単語以内に抑えるなどのテクニクもあるが、小説ではないので特に短い文章が続いても問題はないというのが技術英語の考え方である。

続いて、公益社団法人の日本工業英語協会が主催している技術英検について解説する。なお、二〇二〇年度より名称が「工業英検/工業英語能力検定」から「技術英検/技術英語能力検定」に変更されたが、工業英語の能力を測ることに変わりはない。具体的に技術英語能力検定とは、科学技術全般に必要な技術英語の能力「科学技術文書を読む能力・書く能力を客観的に正しく評価する」検定試験である。試験区分は、プロフェッショナル、準プロフェッショナル、一級、二級、三級に分かれ、試験は年に三回実施されている。受験資格は年齢や学歴を問わずに誰でも受けられるが、試験地はプロフェッショナルのみ東京、名古屋、大阪、福岡の四カ所、一級〜三級は全国各地に分散している。受験料は級によって異なり、プロフェッショナル・一六、五〇〇円、一級・六、四〇〇円、二級・五、三〇〇円、三級・二、六〇〇円(各税込)となっている。試験内容はプロフェッショナルが記述式七く

九問・二時間(英語長文の英文要約、和文英訳、冗長和文の英文要約、テクニカルライティングの考え方、冗長英文のリライト)、一級がマークシート一七問、記述式四問・二時間二〇分(英単語英文解説、英文空所補充一、短文リライト、英文空所補充二、英文和訳(二つから一つを選択)、和文英訳(三つから二つを選択)、二級がマークシート四三問・一時間一〇分(語彙(英↓日)、語彙(日↓英)、語彙解釈、英文空所補充一、英文空所補充二、英文和訳、英作文)、三級がマークシート五七問・二時間(英文和訳、語彙(英↓日)、英作文一、英文空所補充一、英作文二、英文空所補充二、語彙(日↓英))となっている。合格基準はプロフェッショナルが七五%以上の得点率であるが、得点が五〇%未満の解答がたとえ一問でもあると、合計得点に関わらず不合格となる。準プロフェッショナルとはプロフェッショナル(級)の試験で七五%未満だが、六〇%以上の得点率があれば認定される。あと一級と三級は六〇%以上の正解率となっている。

次に各級の実際とその対策について簡単に述べる。まずは二級と三級であるが、基本的には問題集を使って過去問を繰り返しやるのが大切である。英語力はTOEICスコア六〇〇点、英検であれば二級くらいの力が必要である。技術英検二級は「科学・技術英語の語彙力があり、構文・文法を理解している」レベルであるので、工業英検対策というよりもむしろ、基礎的な英語力をまずはしっかりと身につけておかないといけない。

文章の読み書きよりも単語力で突破できる可能性も十分ある。和訳や英作文問題もあるが、解答は選択式なので消去法が使えるし、正答率六〇%以上で合格なので、わからない問題はパスすることも可能である。公式の過去問題集を解きながら出題形式も過去問で覚えることができるので、問題集を一冊くり返し何度も解けばおおよそ大丈夫ではないかと思われる。次に一級であるが、この級は「工業英語全般の知識を有しているレベル」のため難易度は高くなる。実際には文章の翻訳(和英・英和両方)が試験の半分を占める。科学技術といっても電気・電子・ITだけでなく機械や自然科学、化学系も入り広範囲の専門単語が要求される。試験対策は他の級と同様に公式問題を解くことであるが、この級は記述式問題があるため特に注意が必要になる。和訳・英訳には模範解答はあるのだが、解説がないので何をもって正解なのか判断基準が明確ではない。また、制限時間内に解くには翻訳問題を何分で解くべきかペースを上手に掴むことも実際の試験では大切になる。最後にプロフェッショナルであるが、翻訳者や指導者を想定した専門教育が必要で、出題された英文・和文は読んで理解できるだけでなく、それらを自然な日本語(英語)に翻訳する能力が絶対的に求められる。プロフェッショナルは「科学・技術分野の英語文書を読みこなし、かつ正しく、明確に、簡潔に書くことができる」となり出題の中心は英訳・和訳である。リライトと用語問題は翻訳する能力だけでなく、工業英語

の三つの「C」の目線で、「どういった誤解を招くか」や「英文をどう改善できるか」が求められる。具体的に言えば、文中に冗長語が多ければ多いほど文章は長くなり、それだけ紙面が増加し、読む時間もかかるので英文を簡潔に書くには常に情報語に着目する必要がある、さらに冗長な表現はできるだけ避けるよう気を配る必要がある。つまり省略することができる内容は誤解のない限り省略すべきであり、そのためには自分の書いた英文を常に前の3Cの観点から見直す習慣を身に付けることが重要である。テクニカル・ライティングでは、意味が通じる英文ではなく、正確、明瞭、かつ簡潔な英文が求められる。これをクリアするには、ただ翻訳能力を高めるだけでは不十分で、技術英語のエッセンスを十二分に理解してすぐに解答できるまでの瞬発力が求められる。したがって、TOEIC九〇〇点や英検一級の英語力があるだけで合格が保証できるほど簡単なレベルの試験ではない。実際には準プロフェッショナルでも実務レベルと考えられるが、恐らく合格するにはバイリンガルエンジニアとしての実務能力以上のものが求められることは確かである。上位の級に出題される問題はどれも専門性が高く、ある意味バイリンガルエンジニアとして実務で求められているレベルよりも高く、それゆえに受験者の質を正当に評価してくれるのが技術英検のプロフェッショナルのレベルであるとも言える。また、無駄のない英文作成や読解を訓練するのも技術英語の考え方はすべての英

語学習者にとっても役に立つのではないだろうか。

参考資料

日本工業英語協会： <https://jstc.jp>

天理教の男性カリスマの薄化粧をめぐる熊田一雄

この小論では、天理教史上有数の大カリスマであった男性、関根豊松(一八八一—一九六九)が薄化粧していたことの意味を考えてみたい。

関根豊松は、天理教の愛町分教会の創始者である。天理教では、傘下に五〇以上の教会をもち、本部に希望した分教会だけが大会と認められる。愛町分教会は規模からすれば他の多くの大会をはるかにしのぐのであるが、関根豊松が大会となることを希望しなかったため、名称は分教会である。その規模はとも大きく、天理教の教団内の独立教団と言ってもいいくらいである。関根豊松には分派の意志は全くなかったが、もし分派していたら、天理教有数の大分派教団になっていたであろう。

関根豊松は、病気なおしの霊能をもっていたとされている。記録は、関根の病気なおしの能力について、次のように伝えている。

天理教の救済法には大きく分けて二

通りある。ひとつは中山みきの教理を順々と説き、相手が納得することによって助かるというもの。もう一つは相手がその場で半信半疑か、あるいはすぐに理解できなくても霊能で有無をいわさず治してしまうというものである。天理教の主流は前者の方法がほとんどである。いや、現場ではそれがすべてと言っても過言ではない。前者は本人に霊能がなくとも相手が話を納得すればそれだけで多少なりとも霊験があらわれるとされているから、基本的には誰でもできるわけであるが、それだけにそれなりの徳と真実がなければ効果は薄いとみられる。

一方、後者は誰にでもできると言うものではなく、中山みきの霊能を自分ものとして体得していなければどうにもならない。関根豊松はそんな極めて稀な後者の代表例であった(豊嶋泰國『天理の霊能者』インフォメーション出版局、一九九九年、一八〇頁)。

前者と後者は別種のものではなく、後者は前者の極端な形であろう。近代医学というプラシーボ(偽薬)効果は、治療者のカリスマ性に左右される。関根豊松は、それだけの大カリスマだったということだろう。では、関根豊松のカリスマ性は、どのようにして確立されたのだろうか。関根豊松は、その点について以下のように説明していた。

関根は生前、教祖の雛型の道を踏めば誰でも自分と同じように奇跡的な徳

の力をいただくことができると教え諭していた。

「教祖の雛型を踏まずに、教祖同様の不思議な奇跡をみせていただく道理はありませんまい。この教会は皆さんが助かってくださるので、人々は不思議と申されますが、不思議とおっしゃる方が不思議ですよ。私たちは教祖の道を継ぐ弟子です。弟子は、教祖のなされたことを真似たらよいのです。教祖の雛型はわかるものではなく、踏むべきものです。私は教祖の雛型を踏ませただけで、日夜努力しました。その結果がいつの間にか今日の姿になっただけです(『天理の霊能者』、一九三頁)

中山みきの教祖「雛型の道」を日夜努力して「踏む」ことによつて「徳の力」が身につく、と説明していたのである。その関根豊松は、薄化粧をしていた。記録には、次のようにある。

色白で華奢な体つきのせいとか、普段の物腰は女性的で、薄化粧することもしばしばであった。髪は少々薄かったが、頭にはヘアー・トニックをつけ、櫛で髪をきちんと溶かし、洗顔の後、化粧水を肌にもぬり、眉毛をペンシルで書くのである。着物を着る時自分では日舞を習っていたこともあり、踊りが大好きで、興が乗ると、皆の前で踊りを披露することもあった。「坂東豊」という坂東流の名前も持っていた。こ

のように関根には女性的な要素が多分にあった点にも注目したい(『天理の霊能者』、一八二頁)。

豊嶋泰國は、関根豊松のこのような「女性的」(と豊嶋泰國が評する)側面について、近代日本の新宗教における「両性具有」の伝統と関連付けて説明している。中山みきの怪力、大本教祖・出口王仁三郎の女装、天照皇大神宮教の教祖・北村さよの男装といった系譜に連なると見るのである。しかし、私は賛成しない。ジェンダーは分類の原理であり、一人の人間が二つのジェンダーを同時に生きていることは定義上ありえない。「両性具有」の人間は存在しない。関根豊松は、あくまで「薄化粧している男性」だったのだと思う。

二一世紀初頭の現代日本でこそ、若い世代を中心に、薄化粧している男性は珍しくない。スキンケアしている男性も、眉毛の手入れをしている男性も、さらに江戸時代にも、少なくとも江戸では、薄化粧している男性は珍しくなかった。しかし、関根豊松が活躍した二〇世紀前半には、薄化粧している男性は珍しかっただろう。では、関根豊松はなぜ薄化粧していたのだろうか。それは、教祖「雛型の道」を「踏む」ための努力の一環だったのだらう。天理教教祖・中山みき(一七九八—一八八七)も、少なくとも老境に達して宗教者として「道」を説くようになってからは、いつもきちんとした服装をしていた。記録には、次のよ

教祖(おやさま)は、中肉中背で、やや上背がお有りになり、いつも端正な姿勢で、すらりとしたお姿に拝せられた。お顔は幾分面長で、色は白く血色も良く、鼻筋が通ってお口は小さく、誠に気高く優しく、常ににこやかな中にも、神々しく気品のある面差であられた。

お髪は、歳を召されると共に次第に白髪を混え、後には全く雪のように真っ白であられたが、いつもきちんと梳って茶筌に結うておられ、乱れ毛や後れ毛など少しも見受けられず、常に、赤衣に赤い帯、赤い足袋を召され、赤いものずくめの服装であられた(『稿本 天理教教祖伝』天理教道友社、一九七六年、一六五—一六六頁)。

このようにきちんとした装いをしていた女性教祖の「雛型の道」を「踏む」ことに徹底すると、男性でも薄化粧くらいはしなければならぬのだらう。「装い」には、「他者の視線を飾る行為」としての側面がある。他者に不快感を与えない装いは、宗教者にとっても重要なのである。

二一世紀に入り、女性の地位は昔よりは向上し、社会は男女平等に近づいた。それにつれて、男性も以前より身だしなみに気を配るようになった。「草食系男子」とはもともと若い男性に対する褒め言葉として考案された言葉であったが、今では「覇気がない」という若者バツシンの言葉として用いられることが多くなっている。草食系とも称される現代日

本の若い男性は、身だしなみには年輩者よりも気を配る。男性向け美容品の業界は、どんどん成長している。年配の男性の中には、若い男性のこういう傾向を「女々しい」として快く思わない人もいようである。しかし、関根豊松の例を見れば、身だしなみに気を配る若い男性は、年配の男性よりも教祖の「雛型の道」に近いのではないだろうか。

現代の天理教も、本部に全国の男性の大教会長を集めて、「男の身だしなみ」講習会を行えば、「おたすけ」の成功率が上がるのではあるまいか。

参考文献

- 『稿本 天理教教祖伝』天理教道友社、一九七六年
- 豊嶋泰國『天理の霊能者』インフォメーション出版局、一九九九年

人の児ゆゑに、人妻ゆゑに 多門靖容

一、倒置か非倒置か

やや時間の経過した話になるが、二〇一四年八月、奈良女子大学若手研究者プログラムにおいて、阪口由佳氏の萬葉歌に関する発表「物思ひ瘦せぬ人の児ゆゑに——巻二・一二二歌の表現——」（阪口二〇一四）を聞いた。阪口氏の発表の主題は萬葉歌中の「人の児ゆゑに」の適正な解釈を求めるものだったが、当該句の意味と比較するため、類似句「人妻ゆゑ

に」を含む歌が資料に挙げられていた。挙例を見て面白いと思った。若干例外はあるが、おおむね「人の児ゆゑに」は五句に現れ、「人妻ゆゑに」は四句に現れている。「人の児ゆゑに」歌は述部の後に当該句が来る倒置歌で、「人妻ゆゑに」歌は当該句を承けて述部が来る非倒置歌だったのである。該当歌を三首ずつ挙げる。

- 01 大船の泊つる泊まりのたゆたひに物思ひ瘦せぬ人の児ゆゑに（萬一二二）
- 02 海原の路に乗りてや我が恋ひ居らむ大船のゆたにあるらむ人の児ゆゑに（萬二二六）
- 03 千沼の海の浜辺の小松根深めて我恋ひ渡る人の児ゆゑに（萬二四八）
- 04 紫草のほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに我恋ひめやも（萬二二一）
- 05 赤らひく色ぐはし児をしば見れば人妻ゆゑに我恋ひぬべし（萬一九九九）
- 06 篠の上に来居て鳴く鳥目を安み人妻ゆゑに我恋ひにけり（萬三〇九三）

意味的・形式的に近似し、構文上の働きも違くないと思われる両句が、なぜ異なった分布で出現するのか。発表後の質疑で稿者はこれを質問したが、阪口氏、また会場の和歌の専門家から、これに直接応えるコメントはもらえなかった。もともと稿者の専門は古代和歌ではない。専門家にとっては些細な質問をしてみましたかとその場で思ったが、その後もこの疑問は消えなかった。実はこの問題は「古代和歌における倒

置とはなにか」というより大きな問題の一部を構成するものである。なぜなら右のような分布が「人の児ゆゑに」歌、「人妻ゆゑに」歌のみに起こるものなのか、それともその外に例が広がっているのかという問いが背後に控えているからである。

この問題を解くには、萬葉歌全体の倒置歌・非倒置歌を見なければならぬ。と同時に萬葉歌の合わせ鏡として別歌集の倒置歌・非倒置歌も見る必要がある。この話題は大きいため、本所報に記すことがらではない。ただ、阪口氏の挙げた歌群については、現時点で稿者にいささか考えがある。ここにそれを記したい。

二、序詞

01と03と04と06の対立の理由を、ここでは二つの点から説明したい。一つは序詞使用という観点、もう一つは類歌性という観点である。まず序詞使用から。01を再掲しよう。

- 01 大船の泊つる泊まりのたゆたひに物思ひ瘦せぬ人の児ゆゑに（萬一二二）

この歌は二句までが序で三句「たゆたひに」を起す。「たゆたひに」は主節述部の原因をあらわしている。これが直接後ろに係り、四句に述部「物思ひ瘦せぬ」が来る。そうすると、理由句は、もしそれが言いたければ五句に置くしかない。つまり01は序詞が原因で一句から四句の間に「人の児ゆゑに」が入りにくい構造になっているのである。

02は二文構成で、かつ下句に連体節を使っているで措くが、03は01と同様、序詞使用による、四句への述部押し込みという説明が当たると。03を再掲する。

- 03 千沼の海の浜辺の小松根深めて我恋ひ渡る人の児ゆゑに（萬二四八）

この歌は二句までが序で三句「根深めて」を起している。「根深めて」は主節述部の様態をあらわし、やはり直接後ろに係り、四句に「我恋ひ渡る」が来る。頭から序が使われ述部が四句に押し込まれると、理由句はもし言いたければやはり五句に置くしかない。03も01と全く同様に、序詞が原因で「人の児ゆゑに」が述部の前に入りにくい構造になっているのである。これに対し、04と06はどうか。三首を再掲する。

- 04 紫草のほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに我恋ひめやも（萬二二一）
- 05 赤らひく色ぐはし児をしば見れば人妻ゆゑに我恋ひぬべし（萬一九九九）
- 06 篠の上に来居て鳴く鳥目を安み人妻ゆゑに我恋ひにけり（萬三〇九三）

04、05は序詞の使用はない。06は「篠の上に来居て鳴く鳥」が「目」を起す序だが（類似として三三九六番歌）、「安み」と承け、三句までで独立した理由節を形成している。01、03のように直接の述部に直接かかる原因・様態副詞句を起しているわけではないので、非倒置が自然なのだ考えられる。

以上述べた、頭からの序詞使用による四句への述部押し込み、それに伴う五句での倒置句の出現は、「人の児ゆゑに」歌に限った話ではない。稿者の行った調査の結果からは、主節事態を構成する必須補語にも起きていることが確認できる。主格・対格の例を、以下二首ずつ挙げる。また条件節の例も二首挙げる。

主格

07 我が背子が着せる衣の針目落ちず
こもりにけらし 我が心さへ(萬五
一四⑤我情副)

08 うち渡す竹田の原に鳴く鶴の間な
く時なし 我が恋ふらくは(萬七六
〇⑤吾恋久波)

対格

09 奥山の岩本菅の根深くも 思ほゆる
かも 我が思ひ妻は(萬二七六一⑤
吾念妻者)

10 新墾の今作る道さやかにも 聞きて
けるかも 妹が上のことを(萬二八
五五⑤妹於事矣)

条件節

11 川千鳥住む沢の上に立つ霧の いち
しろけむな 相言ひそめてば(萬二
六八〇⑤相言始而者)

12 奈呉の海の沖つ白波しくしくに 思
ほえむかも 立ち別れなば(萬三九
八九⑤多知和可礼奈婆)

個々の歌の説明は省略するが、六首すべてで、序詞の使用により述部が四句へ

押し込まれ、結果的に倒置歌となっていることが確認できる。ここまで、序詞の使用が倒置を誘発することを指摘した。

三、類歌性

次に、類歌性という観点から01〜06について考えたい。

萬葉集の類歌性については鈴木(一九七〇)(鈴木一九九〇所収)をはじめ論者が多いが、ここでは多門(二〇一六)をもとに簡明に説明する。

01〜06について、類歌であることを保証する部分のうち、表現が定まって揺れないところをゴシックで、表現は若干異なるがほぼ同内容をいうところを \langle で、表現が可変的なところをS(スロットの意味)で示す。すると、01〜03、04〜06は以下のA、Bのように示される。また、A、B合わせて一般化すると、Cのように示される。

- A 01〜03 「S」〔「我恋ふ」〕人の児ゆゑに
- B 04〜06 「S」〔「人妻ゆゑに」〕我恋ふ
- C 01〜06 「S」〔「人ゆゑに」〕我恋ふ

A、Bにおいて、スロットを除いたフレーム部分は表現と意味的規定、Cにおいて、スロットを除いたフレーム部分は意味的規定のみで書かれている。類歌が発生する、すなわちフレームとスロットが発生するのは、原理的に一回以上の引用があれば可能である。

フレームとスロットが発生する状況として、どんなものが考えられるだろうか。稿者は(1)個人の表現再利用、(2)贈答、(3)宴、(4)付け合い、(5)学習・試作、(6)歌謡化、があると考えている(多門二〇一六)。

01〜03、04〜06については、(4)の付け合いから説明する。付け合いといっても、皆で一斉にやって一挙に類歌群ができるわけではもちろんなく、既にある歌を意識しながら、自分ならこの素材だ、と個々に付けて楽しむ行為を想定する。

この時、Cのような意味的フレームの使用よりも、A、Bのような表現そのものの引用のほうが機知の楽しさが勝ると、また同じ表現を使用するだけでなく、その歌中の位置までも守ったほうがより機知の楽しさが勝ることは想像に難くない。そう自由ではない、適度な表現の制約のなかで、人がそう詠むなら自分はこのうだ、とスロットを埋める試みだから楽しいのである。

「人の児ゆゑ」歌が倒置で、「人妻ゆゑ」歌が非倒置で歌群を為すのは、このような、当該表現の歌中位置を守る意識が、それぞれの引用の際にあったからだと推測される。

このような意識による、ある個人の類歌群への参加は、語単位ならぬ談話単位の「特定表現 α 」の制作活動である。これはある集団内である特定表現を流通させて親密さや連帯感を確かめ合う、仲間ことばの性格を色濃く持つ。

先に挙げたフレームとスロットの発生

状況六項のうちの(2)(3)は、このような仲間意識が発露する典型的状況であらう。

稿者は現代語の、若者ことばをはじめとする、ある社会集団における新語や流行語の発生動機と、萬葉集における類歌の発生動機は、表現単位の違いを取り払ってしまえば、本質的には同じだと考えている。以上が類歌性から見た「人の児ゆゑ」倒置、「人妻ゆゑ」非倒置分布の説明である。

四、おわりに

以上、表題句の倒置・非倒置の問題について、序詞使用および類歌性という二つの観点から、稿者の見解を述べた。

注

- (1) 序詞と倒置現象については、多門(二〇一五)において口頭で報告し、多門(二〇一八)に記した。
- (2) 創意でスロットに入れる表現が、 α である。
- (3) 仮にその特定表現が一般的でなく、解説コードが集団内限定で保持されていれば隠語になり得るものである。引用と隠語性、その使用に伴う連帯感については、多門(二〇一四)に古物語の会話を事例として指摘をした。古代和歌においては当該表現に隠語性がなかったり、あってもその度合いが今では確かめようがない場合も多いと思われる。このため本稿では隠語性は括弧に入れ、引用と連帯感の二つを萬葉集の類歌発生動機の説明に適用した。

文献

阪口由佳(二〇一四)「物思ひ瘦せぬ人の児ゆゑに―巻二・一二二歌の表現―」奈良女子大学若手研究者プログラム発表資料

鈴木日出男(一九七〇)「古代和歌における心物対応構造―万葉から平安和歌へ―」『国語と国文学』四七巻四号

鈴木日出男(一九九〇)『古代和歌史論』東京大学出版会

多門靖容(二〇一四)『比喩論』風間書房

多門靖容(二〇一五)「スリルとサスペンスの話」(シンポジウム「うたの日本語研究」資料)『日本語学会二〇一五年度春期大会予稿集』

プロジェクト研究

日本人の日記・日誌・紀行・帳簿についての歴史的研究

松園 斉
中川すがね
後藤 致人

当プロジェクト主催の日記をテーマとする研究会の第一四回目は、令和二(二〇二〇)年二月二二日に、例年の如く土曜の午後、文学部の三四二六教室を会場として催された。近年、近世史の報告が少なかったことも配慮し、今回は、埼玉大学大学院人文社会科学科准教授のトーヴェ・ビュールク氏をお招きして、氏のご専門の歌舞伎研究において読み解かれ

多門靖容(二〇一六)「歌の表現史―萬葉集と古今集―」『日本語史叙述の方法』ひつじ書房(大木一夫・多門靖容 共編)

多門靖容(二〇一八)「古代和歌の表現論のプログラム」『日本語の研究』一四巻二号、日本語学会

中村幸弘(二〇一四)『和歌構文論考』新典社

錦織妙(一九九四)「上代短歌における倒置法の変遷」『文学・史学』一六号、聖心女子大学

吉野政治(一九九〇)「人妻ゆゑに―逆的に訳されるユエについて―」『萬葉』一三七号

中間報告

ている二代目市川團十郎の日記などを題材に、「江戸中期歌舞伎関係者らの日記―日記が解き明かす江戸芝居茶屋の実態」というテーマでご報告いただいた。中世史専攻の松園がビュールク氏の研究を知ったのは、近年当研究会とも密接に交流を深めている、東京の「近代日本の日記文化と自己表象」研究会において、ビュールク氏が最近刊行された著書「二代目市川團十郎の日記にみる享保期江戸歌舞伎」(文学通信、二〇一九年)を紹介されたことによる。江戸時代の有名な歌舞伎役者が日記をつけていたことを寡聞にも知らなかったのが、大変興味を持ち、かつ氏がフィンランドのご出身であ

りながら(失礼)、江戸時代の歌舞伎のみならず、その日記まで読み解かれていることにも興味を持ったからである。氏とはご面識がなかったもので、以前同研究会でご紹介いただいた芸文通信代表の岡田圭介氏に連絡を取ってご紹介いただき、メールでご連絡いただいたところ、当研究会でのご報告を快諾いただき実現に至った。ご仲介の労を取っていただいた岡田圭介氏には改めてお礼申し上げたい。



すでに二月の後半に入っており、新型コロナウイルスの影響が出始めていた頃で、開催がいささか危ぶまれたが、田中祐介氏(明治学院大学)、柿本真代氏(京都華頂大学)にもご参加いただき、幸いにも何とか無事に開催できた。私自身、この文章を書いている現在(六月)に至るまで、対面で参加した研究会はこれが

最後となっている。研究会活動が通常通りできる日が一日もはやく戻ってくることを望んでやまない。研究会は、いつものように全体テーマを設定したが、今回は「芸能者の日記をめぐって」と題し、ビュールク氏の報告と関連させ、前座として松園が「中世の芸能者の日記について」というテーマで報告を行なった。芸能者の定義から始めて、それに含まれると考えられる、中世の楽人・連歌師・茶人・談義師の日記・記録を紹介しながら、その特色について検討した。ビュールク氏は、『栢庭日記』『柿表紙』などのさまざまなテキストで伝来する市川團十郎の日記以外に、やはり歌舞伎好きで有名な大名柳沢信鴻の日記『宴遊日記』『宴遊日記別録』などを多く紹介されるながら、副題にも掲げられた、江戸の

芝居茶屋の問題を中心に大変興味深い報告を聞くことができ、質疑応答も盛り上がり、大変充実した会になった。様々なことが不便になりつつあった時期にもかかわらず、ビュルク氏をはじめ、会にご参加いただいた皆様に改めて感謝を申し上げます。
(文責 松園)

マルコ・ポーロの夢を追って —西洋が想像した日本(14世紀初頭から20世紀初頭まで)

グレゴリー・L・ロウ
小林奈央子

「旅文化をめぐる学際的研究」プロジェクトでは、グレゴリー・L・ロウ准教授を中心に、愛知学院大学文学部博物館二〇一九年度秋季展示として「マルコ・ポーロの夢を追って—西洋が想像した日本(14世紀初頭から20世紀初頭まで)」と題する展示を実施しました。展示期間は、二〇一九年一月三日から八日、学園祭期間を含み、学内・学外から多数の来観者を迎えました。

展示物は、ロウ准教授の個人所蔵品を中心に、一部、小林奈央子准教授の所蔵品と写真パネルを展示しました。以下、同展示のリーフレットにしたがい、概要を紹介します。

はじめに

マルコ・ポーロが「黄金の国」と表現したときから、日本は西洋の想像の世界

において重要な位置を占めてきました。本展示では、20世紀初頭までに西洋人旅行者が作成した、あるいは、西洋人旅行者向けに作成された日本に関する豊富で多様な視覚的 Image(イメージ)―絵・写真・地図などの数々を紹介しました。これらのイメージは、日本を世界に紹介し、世界中の人びとが日本を理解するのに役立ちました。また、世界の人が「Japan」(日本)と聞くと思い浮かべる、独特の精神的なイメージを形成する一助となりました。

この展示は、第一部「マルコ・ポーロ」から第七部「名所に関する観光資料(中部地方)」までの七部の構成ですが、今日私たちが長い旅行をしたときのように、その道すがら何人かの「魅力的な旅行者」に出会うこととなります。

第一部「マルコ・ポーロ」

伝説的人物であるマルコ・ポーロ(一二五四年―一二二四年)を見つめ、彼の広範囲にわたる影響力について考えます。ポーロは日本へは一度も来たことがありませんでしたが、日本について彼が書いた言葉は、最初に西洋人の想像力を刺激し、西洋人旅行者たちはそこに記述された世界を実際に見つけることに挑戦しました。

第二部「エンゲルベルト・ケンペル」

オランダ東インド会社に勤務していたドイツ人医師であり、江戸時代に日本に居住することを許された数少ない西洋人の一人、エンゲルベルト・ケンペル(一

2019年度文学部博物館
秋学期学内展示

人間文化研究所
旅文化研究会

マルコ・ポーロの夢を追って
西洋が想像した日本
(14世紀初頭から20世紀初頭まで)

会場：愛知学院大学
日進キャンパス
3号館西棟4階
文学部博物館展示室
期間：11/3(日)～11/4(月・祝) 愛学祭
10:00～15:00
11/5(火)～11/8(金)
10:00～16:30

六五一年―一七二六年)についてみます。彼は日本に短期間しか住んでいませんでしたが、その間に膨大な情報を収集し、西洋人が日本のイメージを形成するのに大きな影響を与えました。

第三部「マシュー・ペリー」

ペリー提督、すなわち、マシュー・ペリー(一七九四年―一八五八年)と彼による日本遠征についてみます。ペリーがアメリカに戻ってから書いた遠征に関する公式記録は、おもに二人の才能ある芸術家によって創作された日本の印象的な絵で埋め尽くされていました。

第四部「西洋人向けに作成されたガイドブック」

西洋人によって作成された Image か

ら焦点を移し、明治・大正時代に、日本を訪れる西洋人向けに作成されたガイドブックやそのほかの資料を紹介しました。

第五部「日本にやって来た西洋人旅行者」

明治時代に日本に来た西洋人旅行者の一部を取り上げました。そうした旅行者の一人、イザベラ・バード(一八三二年―一九〇四年)は、西洋人がそれまでみだことのない「未踏破の道」を旅しました。また、日本を自転車で旅したトーマス・ステイブンス(一八五四年―一九三五年)、山岳と精神性に関心があったパシヴァル・ロエル(一八五五年―一九一六年)、南極への遠征に参加しようとしていた有能な写真家のハーバート・ポンティング(一八七〇年―一九三五年)などいます。

第VI部「フランス・プリンクリー」

フランス・プリンクリー(一八四一年―一九一二年)の『日本―その歴史・芸術・文学』(一九〇二年)を紹介しました。この一連の本で、日本は、「長く誇り高い歴史をもった美しい平和な国」として表現され、そうした視角的なイメージが注意深く選定されています。

第七部「名所に関する観光資料(中部地方)」

二〇世紀初頭から西洋の旅行者向けに制作された、特に素晴らしいとされる名所に関する観光資料について、中部地域を中心に取り上げました。

以上が展示の概要ですが、旅行者または旅行者を歓迎する人びとによって作成されたこれらの視覚的な記録を通して、私たちは「彼らが見たまま」、そして、「彼らが見せたかったように」日本を見ることが出来ます。

悲しいことに、この展示の直後に新型コロナウイルス感染症の流行が世界を襲い、現在も「旅」が大きく制限されています。流行が一日も早く収束し、私たちが再び、そしていつそ新鮮な「旅」に出られる日を切望するばかりです。



第二次大戦における日系アメリカ人強制収容が「今」に伝えること

— And Then They Came for Us 「そして私たちの番が来た」を見て学ぶ —
高木(北山)眞理子

二〇一九年一月一日(一六時三〇分)―一八時三〇分、愛知学院大学三号館三五〇八教室にて、第二次大戦における日系アメリカ人強制収容が「今」に伝えること―*And Then They Came for Us* 「そして私たちの番が来た」を見て学ぶ―と題して研究会を開催した。外部からの講師として、日系アメリカ女性について長年研究を重ねてきた柳澤幾美氏をお招きした。柳澤氏は本学文学研究科からの博士学位取得者で、現在多くの大学にて教鞭をとっている方である。今回の研究会は、「旅文化をめぐる学際的研究」プロジェクト・メンバーである小林奈央子(文学部准教授)の発案で、日系アメリカ人強制収容についての歴史的背景や真実、さらに現在のアメリカの状況を知った上で、*And Then They Came for Us* を鑑賞し、参加者とともに考えるという目的で開催された。

まず、やはりプロジェクト・メンバーの高木(北山)眞理子(文学部教授)が「排日運動と強制収容所―米本土の日系アメリカ人の歩み」として、今回の研究会の中心課題である「太平洋戦争時の日系アメリカ人強制収容」の背景史を簡単に述べた。なぜ日本からの移民がアメリカ西

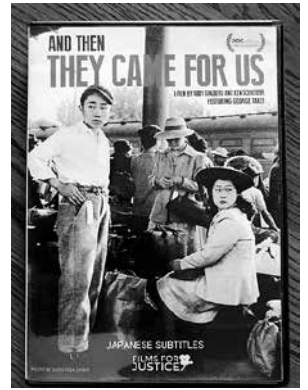
海岸で排斥運動のターゲットになったのか、二〇世紀初頭から具体的にどのような排斥運動があったのか、そして強制収容はどのように始まり、収容所とはどのような場所だったのか、収容者に対してアメリカ政府(War Department & WRA)によって行われた Loyalty Questionnaire(忠誠アンケート)の影響はどうだったのかなどが説明された。

そして柳澤氏にバトンタッチし、*And Then They Came for Us* 「そして私たちの番が来た」(二〇一七年)という映画について、そして「この映画が今我々に語ること―歴史を繰り返さないために」について講演していただいた。

このフィルムを監督したアビー・ギンズバーグ (Abby Ginzberg) 氏は元弁護士であり、アメリカ放送界のピューリッツァー賞といわれるピーボディ賞を受賞した経歴を持つ。彼女は人種に関わる差別や社会的正義に関するドキュメンタリーを三〇年以上も作り続けて来た。だが彼女は、日系人の強制収容に関する写真集 *Un-American: The Incarceration of Japanese-Americans during World War II* (二〇一六) の出版関係者ローガン (Jonathan Logan) に、その内容に合わせたドキュメンタリーの制作を依頼された当初は、乗り気ではなかったという。しかしちょうどこの頃、アメリカ合衆国のドナルド・トランプ大統領が「イスラム教徒のアメリカ入国を禁止する」と発言し、第二次大戦中の日系人強制収容との関連が語られるようになってきた。それを見たギンズバーグ氏は、第二

次大戦中強制収容所に送られた日系人たちの経験と、現在のイスラム教徒の移民たちの状況を比較し、その共通項を明らかにすることに焦点を合わせた映像作品を制作できるのではないかと考えたのだ。日系人の強制収容が実行された時、当時の多くの一般アメリカ人が「沈黙」をした。一方、今日のイスラム教徒入国禁止については、戦時中「無視されてしまった」日系人が先頭にたつて「入国禁止反対運動」を進めている。ギンズバーグ監督はここに注目し、日系人強制収容というアメリカの「負の歴史」を多くの人々に知ってもらうこと、「日系人強制収容」が今日のイスラム教徒入国禁止措置と同様であることを明確にすること、そして今こそそれに対して反対を唱えるときであると人々に気づいてもらうことを、映画制作の目標に掲げたのである。

この映画の中には、日米戦争勃発後日系人に対して次々に出された差別的命令(「日系人外出禁止令」、「強制収容命令」など)や、日系人が不法に解雇された事実に対して、裁判を起こした勇氣ある二世達の行動が明らかにされる。Minoru Korenatsu, Gordon Hirabayashi, Fred (Min) Yasui, Gordon Hirabayashi, Fred Korenatsu, Mitsue Endo らの行動である。この二世たちが裁判を起こした背後には、サポートする人々がいたことは事実であるが、それは決して十分な人数ではなかった。彼らの裁判において、日系人に対する人種的偏見に満ちた考えや、日系人が国家的脅威である(なぜなら敵の日本人と同じ顔をしている)という考えにもとづく「嘘」を述べた当時の政府



やつらが労働組合運動家たちを連行しに来た時、私は黙っていた。私は標的じゃなかったからやつらがユダヤ人を連行しに来た時、私は黙っていた

私はユダヤ人じゃなかったからやつらが私を連行しに来た時、私のために声をあげてくれるものは残っていなかった

And Then They Came for Usとは、

側の裁判関係者の意見がまかりとおってしまつたのだ。そして、このような「不正にみちた」裁判が行われていたことに対して、一般のアメリカ人は同じような偏見をもって見ていたか、裁判自体を知らなかったか、全く無関心であった。日系人は、アメリカ国家がおかした過ちの犠牲になった経験をもっているからこそ、二度と同様の過ちをアメリカの中で起こしてはならないと考えている。この映画は、「アメリカ的でない」とみえる「外見」をしていたり、「アメリカ的でない」宗教を信じている人々が、現在のアメリカ政府によって「アメリカ国家の安全のため」という理由づけのもと収容所に送られたり、迫害されることに対して、なぜ日系人が強い抗議行動をおこなっているかを理解させてくれる。この映画の冒頭で、ルター派牧師で反ナチ運動組織(教会)にいたマーティン・ニーメラー牧師の言葉が朗読される。

やつらが共産主義者を連行(迫害)しに来た時、私は黙っていた

私は共産主義者じゃなかったから

今回の研究会は、これまでの「旅文化をめぐる学際的研究」と少し異なるようにみえるかもしれない。しかし人々が生きていくなかで守るべき自他の自由と権利の大切さを、私たちはこの講演から、そしてこの映画から学ぶことができたのではない。旅をするということは、自らのものと異なる多様な言語・文化・宗教・外見をもつ人々の存在を、身を以て知り、そうした違いを受け入れ、理解し、逆に自分の特性を受け入れてもらうように努力することではないか。この映画と講演のおかげで、多様な価値観の存在と大切さを知り、お互いの自由と権利を侵害せずに生きていくことの必要性を、あ

らためて知った気がする。標的が自分だけでなくとも、自由や権利を奪われる人を見たのであるなら、何かをしなくてはならないのだ。歴史を学ぶということとは、過去の過ちを繰り返さないことにつながるのだと、あらためて述べておきたい。最後になってしまったが、多忙中の研究会のための時間をとってください。柳澤幾美氏に心より御礼を申し上げる。

現代宗教研究会の中間報告

林 淳
伊藤 雅之

一、アメリカ仏教の現在

人間文化研究所の講演会が、二〇一九年一月一日〜三日に開催され、武蔵野大学名誉教授のケネス・田中氏が「伸びるアメリカ仏教―仏教が西洋の壁を初めて越える」というタイトルで話をされた。田中氏の説によれば、アメリカ仏教には四つの担い手がある。第一に、新アジア系アメリカ人仏教徒。一九六〇年代以降に、ベトナム、タイ、カンボジアなどから移住した人々による。第二に、第二次世界大戦前から移住した中国系、日系の人々による。第三に、主に欧米系のアメリカ人であり、仏教への改宗者。瞑想に関心を寄せる。第四に、創価学会イェンターナショナルUSAの人たち。ここには、アフリカ系、ラテンアメリカ系のアメリカ人の割合が多い。このなかでメディアや研究者が注目しているのは、第三のキリスト教から仏教への改宗者の存

在である。

一九七〇年代半ばにはキリスト教徒の割合が九十一%であったのが、二〇一四年には七十一%に激減した。それに代わって増えたのは、無所属という回答で、一九七〇年代には四%であったのが、二〇一四年には二十三%に上昇し、その他の宗教だという回答も、一%から四%に伸びている。現在、仏教徒であると答えるアメリカ人は、一%だという。三億三千万人近くの人口であるから、三百万人ほどの仏教徒がいることになる。先ほどの数字で見ると、キリスト教徒の割合の激減、無所属の人の急増と、仏教徒の人口の着実な伸長は連関していると考えるべきであろう。

アメリカ仏教の主な特徴は三点あると田中氏は指摘する。第一に、瞑想・メデitativeイション。これが仏教の人気を支えてきた。第二に、社会参加。「自分の心に留まり、世のためにならない宗教は本物ではない」というアメリカに共有されている信念に合致した。第三に、アメリカではあまり聞くことがない死生観を提供できた点。第一の点は、すでに多くの人が指摘していることであり、それに田中氏は、第二、第三を加えた。ベトナムの禅僧で平和活動家のティク・ナット・ハンの提唱した「社会参加型仏教」が、アメリカにおいて支持され、仏教の一特徴として認識された。第三の死生観は、田中氏が、中国浄土教を専門とする仏教学者で、かつ浄土真宗の僧籍を持つことに関連していると私は見る。この三点以外にも、男女の平等性、超宗派性なども

アメリカ仏教の特徴として挙げられている。

田中氏は、先進国において宗教形態のパラダイムシフトが起こっているという。それは、「信じる宗教」から「目覚める宗教」への変容である。誤解をおそれずに言えば、信仰、罪、懺悔、道徳を説いてきたキリスト教ではなく、平和、調和、縁起、瞑想を重んじるアメリカ仏教が未来の宗教を先取りしている。アジアからの仏教が「西洋の壁」を越えたように、今度はまた「西洋の壁」を越えて日本にも伝えられはじめた。日本だけではなく、世界に広がる可能性はある。田中氏は、「逆輸入」という言葉でアメリカ仏教の日本進出を提唱している。

田中氏のアメリカ仏教論は多岐にわたるが、日系移民が持ってきた日本仏教の延長にあるものではなく、アメリカのなかでアメリカ人の価値観に適合し、瞑想・メデイテーションの実践を媒介にして創造された新しい仏教なのである。「仏教も変わる、アメリカも変わる」という言葉が、田中氏の著書の副題としてあるが、変化する時代における宗教的なメッセージとして受けとめることはできない。私は昔に勉強したままに、アメリカをプロテスタント国であり、福音派が「主流」となって、政治的・社会意識的に保守層を形成していると今も考えている。「信じる宗教」は消えないし、「信じる宗教」は世界的な保守化傾向によって勢力を増していくと予想している。「信じる宗教」は、同じ信仰・価値観を「信じない」人を見つけて、自他の分割線を

引くための根拠を提供できる点に特徴はある。「目覚める宗教」は、自他の分割線という思考法を相対化する力を秘めているのであろうか。目覚めの悪い私としては、「アメリカは変わらない」と考える人たちの心と動向が気になるころである。(林淳)

二、「三つの顔をもつ男」のアメリカへのまなざし

本研究プロジェクト「現代宗教に関する情報の収集と分析」と密接に関わる、ケネス田中先生による貴重な講演を拝聴する機会をいただいた。当日の講演の内容は林淳先生にまとめていただいている。わたしはおもに当日の講演、その後の懇話会に参加しての雑感を記すことにしたい。

ご講演のタイトル「伸びるアメリカ仏教―仏教が西洋の壁を初めて越える―」、あるいは代表的著作の一つ『アメリカ仏教―仏教も変わる、アメリカも変わる』（武蔵野大学出版会、二〇一〇年）からもうかがえるように、田中氏は「仏教―アメリカ」というとても大きな対象を扱っている。それゆえに、多くの聴衆、読者が関心をもつ講演や著作となつているのだろう。また直接お話をうかがう機会をいただいた今回の講演を通じて、田中氏のユーモアあふれる話し方、ご自身の体験をまじえての説得力のある説明はとても感銘を受けた。

関心をもつてきた。また大学院時代、アメリカ東海岸フライデルファイアで九年間生活し、九〇年代のアメリカの宗教文化を肌で感じてきた経験がある。田中氏が日系三世として育ち、大学で学び、研究・教育生活を送られたサンフランシスコ、パークレー、スタンフォードといった場所は留学中に何度か訪れたことがある。そこはアメリカ東海岸とはずいぶん異なる別世界だった。こうした研究関心や生活上の接点をふまえつつ、田中氏のお話とその背景にあるものについて素描したい。

ケネス田中氏を一言で形容するならば「三つの顔をもつ男」となる。一つめは、仏教学者としての顔。氏は、スタンフォード大学や東京大学で学んだのち、UCパークレーで仏教研究にて博士の学位を取られている。今回の講演でも、現代アメリカの宗教、とりわけ仏教を受容する社会状況や実践する人々の特徴について考察されていた。時代ごとの変化などに着目しながら、具体的データを提示しつつ論じられている姿はまさに仏教学者としての顔である。

二つめは浄土真宗の僧侶としての顔だ。氏は一九七八年、三二歳のときに浄土真宗の僧籍を取得されている。一九八〇年代中頃以降、北カリフォルニア州仏教協議会や仏教徒平和協会で評議員をされ、九〇年代にはサンフランシスコ禅センター所員などを務められている。「仏教も変わる、アメリカも変わる」というのは、仏教学者というよりも、アメリカや日本での仏教の普及にご尽力された僧侶の顔をもつ田中氏の決意であり、願いでもあるのだろう。

三つめは日系アメリカ人としての顔だ。一九四七年に山口県で生まれ、一九五八年、一一歳のときに日系アメリカ人の両親と渡米。その後、大きな社会変化を何度も経験するアメリカ社会に身を置き、中学、高校、大学時代を過ごされた。一九六〇年代以降の過去六〇年間において、当初は日系人にとつての宗教であった仏教が、時代とともに仏教自体の特質も、それに関わる人たちの人種、民族、階層などの特徴もきわめて大きな変化を遂げる。「仏教が西洋の壁を初めて越える」というのは、日系三世としての顔をもつ田中氏が慣れ親しんだ生活世界から見えてきた強烈な印象だったのでないか。

こうして捉えようと、「伸びるアメリカ仏教」―仏教も変わる、アメリカも変わる―「仏教が西洋の壁を初めて越える」として語られている内容は、研究者としての分析、僧侶としての期待と決意、日系アメリカ人三世としての驚嘆と感慨深さなど、三つの異なる視点が交錯しつつ展開されたアメリカ仏教論だったように思われる。

三つの顔をもつ田中氏だが、そのまなざしの先にあるのはカリフォルニアだろう。氏の語るアメリカをカリフォルニアやアメリカ西海岸に置き換えると、講演の内容がとてもスムーズに理解できる。アメリカの国土面積は日本の二五倍。田中氏が生活の拠点にされていたカリフォルニア州だけで、日本の一・一倍。日本

とほぼ同じ大きさである。アメリカは多民族国家であるが、州や地域や都市によって歴史や文化が大きく異なるのも特徴である。たとえば、中西部から南東部にかけては、バイブル・ベルト（聖書地帯）と呼ばれ、南部パブテスト連盟や福音派などの勢力が強く、キリスト教に熱心な信者が多い。今日では、メガチャーチ（巨大教会）と呼ばれる場所でロックコンサートさながらな礼拝スタイルが一般化しつつあり、教会出席率も高い。ボストン、ニューヨークといった東海岸においては、リベラル派のキリスト教が支配的である。ただし、東部名門大学のキャンパスやその周辺では、仏教やヒンドゥー教系のグループが熱心に活動している。非キリスト教的な世界観が大学関係者へアピールするからだろう。やや一般化しすぎではあるが、こうした地域や都市ごとの宗教的特色を挙げればきりがない。

域であり、そのなかでも教育程度が比較的高い中流階級の人々だったのではないだろうか。もちろん、カリフォルニア以外の地域に仏教が浸透していないというわけではない。ただ、仏教が西洋の壁を初めて越え、仏教の変容とともにアメリカの変容をもはつきりと目撃できる場所があるとすれば、それはアメリカ西海岸において他にないだろう。

田中氏の講演と懇話会に参加して、氏が日系アメリカ人三世として生活をし、真宗の僧侶として活躍され、仏教学者として研究に従事されたアメリカ西海岸の空気にふれた感じがした。ケネス田中先生のご講演、懇話会でのお話に心から感謝したい。

（伊藤雅之）

中国道教と八仙

林 淑 蕙
林 淳

一、はじめに

台湾にも日本にも寺院や僧侶がいて、どちらの国においても仏教は人々の信仰を集めている。両国のあいだで寺院の形態や僧侶の活動に違いはあるものの、共通する面は多い。しかし民間信仰に注目すると、台湾と日本とはまったく異なる様相をあらわす。台湾には、道教の神々が祀られている。日常的に民衆の信仰対象になっている。日本にも、鍾馗を描いた絵や像はあるが、道教の神々にはほとんど馴染みはない。反対に日本では神道、修験道が民間信仰と結びつくが、台湾には神道、修験道は存在しない。このような違いは、両国の長い歴史によるものである。本稿では、林淑蕙が調べた道教に由来する民間信仰の神々「八仙」を紹介する。

中華系の中国人の間には八仙人がよく知られている。八仙とは、李鉄拐（り・つかい）、鐘離権（しょう・りけん）、藍采和（らん・さいか）、張果老（ちよう・かろう）、何仙姑（か・せんこ）、呂洞賓（りよう・どうひん）、韓湘子（かん・しょうし）、曹国舅（そう・こくきゆう）である。八仙人にもまつわる話は「八仙過海」と「八仙慶寿」などが有名で、ドラマや劇作によく取り上げられ、民間によく知られたり、道教の仙人系譜に定着していると考えられる。

八仙の中には、各階層の出身者がいるので、八仙の多様性は中国社会の全体像を表しているといえる。大形徹「中国人と道教——『東遊記』の八仙をめぐる考察——」には、八仙の歴史が、つぎのように説明されている。

八仙の呼称は古くからあり、他の名前が挙げられることもあったが、唐、宋、元と時代をへて、明の呉元泰が『東遊記』の中で上記の八人を確定したといわれている。八仙の組み合わせは、男女老若、富貴貧賤、文莊粗野といったバランスが程よい。老は張果、少は藍采和、韓湘子、将は鐘離権、書生は呂洞賓、貴は曹国舅、病は李鉄拐、婦女は何仙姑とされる。八仙中には社会の各階層の人々が含まれており、人々はその中に自分によく似た人物を探しうるとい¹⁾う。

八仙が人々の信仰を集めた一大要因は、八仙の階層の多様性にあつたとい²⁾ても過言ではない。本稿では、八仙の特徴と民間信仰の位置付けなどについて述べてみる。

二、八仙の群像

①李鉄拐

李鉄拐にまつわる伝承は、『山堂肆考』、『列仙伝』などにも似た話がいくつある。ここでは『東遊記』の話を紹介する。本来気丈な体を持つ李玄が、修行するために、魂を体から脱離させ、華山の老君（道教の最高神）に会いに行った。出かける際に、「七日に経って戻らなければ肉体を焼いてくれ」といい、弟子に自分の肉体を託した。しかし、六日目に弟子の母親が危篤という連絡を受けた。師匠李元が死んだと思った弟子は、その肉体を焼いて母のいる故郷に戻った。帰ってきた李玄の魂は自分の肉体を見つけれず、代わりにゆき倒れになった餓死した死体に憑依した。それは、後世に八仙図に描かれた姿であつた。

色が黒く、髪はバサバサ、ひげが縮れ、どんぐり眼、やせて醜く、衣服をただけ腹を出し、片足が不自由で鉄拐をつく。頭には孫悟空のような金箍（金のタガ）をはめ、背には、ひょうたんを背負っている。

窪徳忠によると、「人々が片足で食を乞いて歩くのをばかにするので、持って来た杖を投げると龍になり、その龍にのつてどこかへ飛んでいったという話もある」⁽³⁾。李鉄拐の乞食外貌に対して、同時の社会が乞食や貧者や流れ者にも親切にする道徳を奨励する思いもあったという説があった。

② 鐘離権

鐘離権はいつの時代に生まれたのが不詳だった。宋の『宣和書譜』にすでに記載されている。漢の時代に生まれたという説もあったが、『訂訛雜録』に記載された「天下都散漢鐘離」を誤読したものだ⁽⁴⁾と、大形徹は指摘している。『東遊記』の中には、鐘離権が漢の昌君であったと設定されている。

鐘離権は全真教の五祖の一人である東華帝君から教わり、道を得た。提唱した虚心論は、仏教の「空」説に近いものと思われる。そのほかに、長寿秘訣、金丹火訣、青竜劍法など有名だ。冠や頭巾をかぶらないと無作法だと非難される中国人にとって、鐘離権の仙人図像には頭頂が禿げているものが多いから、魂を出現させやすくしているようにだともいわれる。その上に仙人が持つ宝扇は、「解難救世」の道具とみられる。鐘離権は、呂洞賓が彼の弟子だという点で注目される。

③ 藍采和

藍采和は李鉄拐と同じく乞食である。容姿が美しいので、女性と間違えられることがおおい。いつも破れたぼろぼろの

単衣に六つの止め金のついた黒木ベルト、幅三寸余りを占め、片足は靴を履き、片足は裸足。いつも巷に銭を乞い、手には大きな拍板(拍子木)を持ち、酔って足を踏み鳴らしてうたった。お金があれば貧者に贈り、あるいは酒屋に預け、天下を周遊した。藍采和は、貧乏書生の象徴的存在になっている。

④ 張果老

張果老は、本来張果という。『東遊記』によるととは白い蝙蝠だったが、天地の気を受け、長い年月をへて、人間に化けた。張果老は、常に白いロバに乗って行動した。日に数百里を走るのだが、休憩時にロバを折りたたみ、紙のような厚さで布はりの箱にしまった。また乗るときに、水を吹き付ければ再度ロバに戻ったという。張果老は山西省の中条山にこもり、数百歳だともいわれ、唐の玄宗の時に宮廷に呼ばれて法術を見せたともいう。張果の話は、『旧唐書』、『新唐書』の方技伝に記載がある。

⑤ 何仙姑

何仙姑は、八仙の中に唯一の女性だ。窪徳忠の説明によると「彼女が十四、五歳になった時、一人の神人が、雲母の粉を食べると軽くなり不死になることができると教えてくれた夢を見た」⁽⁴⁾。目覚めて試しに雲母を飲み、身が軽くなったという説があった。幼いころ不思議な人とお会い、桃をもらって食べた後飢えないようになった。その後、人の禍福吉凶を知るようになった。しかし、何仙姑の持ち

物は蓮の花である。

⑥ 呂洞賓

呂洞賓についてまつわる話は、実に多い。つぎの文は、呂洞賓の志を完璧に描き出したものである。

莫大神通、全在忠孝、
利己利人、千秋大道。
自古至今、因縁非渺、
信筆描来、当前写照。

すべての神通が忠孝精神を奨励し、すべての行いが利己利人のためだ。千秋萬世に不変な道義である。古今のすべての因縁に連結する軌跡、原因がある。呂祖の画像を描くこと、呂祖伝記を書くことも、現代社会生活様相を反映することだ。

これを見ただけで、呂洞賓がいかに道教において尊敬されているかが窺える。道教の神々のなかでも高い位にあるともいわれ、『東遊記』の中に活躍する場面が少なくない。彼は生まれつき、仙人格を持ち、聡明で子供の時から日に一万語も覚えることができるなど、その存在感は強調されてきた。『東遊記』においては、主役の存在と見なされている。そのほかに、『呂真人本伝』、『宋史』、『武昌志』などにも多数記載されている。それにより、道教において全真教の開祖である呂洞賓の重要性が窺える。

⑦ 韓湘子

韓湘子は唐の文豪韓愈の甥とされる。

生まれつき仙人の気質があったが、若いころ、酒ばかり飲んで放蕩していた。「二十歳のころ突然行方不明になったが、しばらくして帰ってきた。見るとほろをみにつけ、行いも普通ではない」⁽⁶⁾。煉丹術に熱心であった。呂洞賓らと会い、仙道を得た。何度も仙術を使い、叔父韓愈を助けた。彼の持ち物の笙は特に注目するものでないが、劇においては聴覚効果あがる。

⑧ 曹国舅

曹国舅は宋の曹太后の弟である。練り返し悪事をはたらき、無法な殺人をおかしたので、国舅の名に恥をかかせることになった。山中に籠って修行していた。鐘離権と呂洞賓がやってきて、おまえは修養しているそうだが、一体なにを養っているのかと聞く。曹国舅が道を養っているかと答える。道を養うとはいうものの、その道はどこにあると思っているのかと、笑いながら問い返す。国舅が黙って天を指すと、それでは天はどこにあるのかとたたみかける。国舅が自分の心を指す。鐘離権と呂洞賓も、「曹国舅が自分で本来の面目を自得している」ことを認めた。また「天下の理として、善を積むものは栄え、悪を積むものは滅びる」という考えから、太后が貧乏な人たちを救済することで、弟に罪を償う処置を取った。このように道徳を作り上げる。曹国舅は、玉版を持っていたので、権力を象徴する。

三、おわりに

八仙信仰は中華系社会に普遍的に知られている。八仙図を家の仏棚にかけるだけでも、ご利益があると思われる。実際にその八仙の人物が実在したかどうかを詮索する必要性を感じる人はいないであろう。大形徹は、八仙の像や画についてつぎのように述べている。

八仙の像は各地にある。北京の全真教の白雲觀に八仙が祀られ、西安には八仙宮がある。民間の泥人形や吉祥図、意匠として用いられる暗八仙の類に至れば枚挙に暇がなく、彼らの持つ宝貝だけで彼らの一人一人を想起できるまでになっている。文献では彼らの持ち物は判然としない場合が多い。しかし雑劇の中では彼らを区別できる標識として視覚的にも聴覚的にも必要欠くべからざるものであったのだろう。

今まで八仙について深く考えたこともなく、ごく自然に生活の一部となって八仙を受け入れてきた。神仙的存在の人物が、日常的な生活に密着しているのも、ドラマや劇などの上演によって身近に知っているためであろう。大形徹はつぎのようにまとめている。

劇や小説の類に現れる話が還流して現実の信仰の対象とされていく。不可思議なことである。しかし道教という宗教それ自体、過去から現在に至るまで無数の神々や仙人たちを生み出し、それらを消化しながら現在まで生き続

けてきた。八仙の信仰の中にも、生きてきた宗教、道教を見ることが出来る。(9)

現代において科学が発達し、医療や医学の研究は進み、人類社会は進歩してきた。その一方で、科学では証明ができない心理的な側面があつて、宗教がその面をカバーしているように思われる。八仙の普及を見ると、いかに絵画、ドラマ、劇などのメディアが重要な役割を果たしてきたかがよくわかる。道教が再び注目される理由は、そこにあるかもしれない。

注

- (1) 大形徹「中国人と道教——『東遊記』の八仙をめぐる——」中村璋八「中国人と道教」汲古書院 一九九八年。
- (2) 同上。
- (3) 窪徳忠『道教の神々』平河出版社、一九八六年、一九〇頁。
- (4) 同上、一九二頁。
- (5) 高忠信審閲、張宝業訳「時空明燈的呂祖身影」中華道教純陽祖師協会、二〇一二年、十一頁。
- (6) 注(3)と同じ、一八七頁。
- (7) 同上、一九〇頁。
- (8) 注(1)と同じ。
- (9) 同上。



〔編集後記〕

二〇二〇年八月現在、米津玄師の新アルバム『ストレイシープ』が音楽ヒットチャートのトップを走っている。このアルバムの冒頭は、大ヒットした『Lemon』や『パプリカ』ではなく、宮沢賢治の名作『銀河鉄道の夜』をふまえた『カムパネラ』である。なぜか。

銀河鉄道の夜の、「その後のジョバンニ」の立場から死んだカムパネラを想うレクイエムだが、作品のエッセンスを捉えている。銀河鉄道の夜のテーマは、「前思春期の親友関係」だと思ふ。精神科医のサリヴァンは、子供時代の自己中心性を脱し、かといってまだ性が侵入してきてないこの時期の親友関係こそ、愛の経験の基本であるとした。銀河鉄道の夜は、親友カムパネラを失って、フロイトのいう「対象喪失による体内化」が起きて、ジョバンニが利他的な人間へと精神的に成長するという物語である。精神科医の中井久夫によれば、世界的に、性の侵入の早期化によって、前思春期の親友関係は、危うくなっている。米津玄師は、直感でそういう状況を捉えて、前思春期の親友関係を称える曲を冒頭に置いたのである。

(宗教文化学科 熊田一雄)

〔人事報告〕

- 一、所長の交代
就任 (日本文化学科) 多門 靖容 教授
退任 (歴史学科) 藤澤 良祐 教授
- 一、運営委員の委嘱
新任 (歴史学科) 中川すがね 教授
- 新任 (英語英米文化学科) 伊藤 雅之 教授

一、新所員の紹介

- 宗教文化学科 横山 龍顯 講師
- グローバル英語学科 桜井 正 准教授
- 一、嘱託研究員の委託
杉田 大和 本学大学院文学研究科
林 淑蕙 本学文学部非常勤講師
大羽 恵美 本学文学部非常勤講師
(以上 二〇二〇年四月一日付)

The News Letter of the Institute for Cultural Studies
Aichi Gakuin University
No.46 2020

愛知学院大学
人間文化研究所報
第四六号

令和二年九月二〇日
〒四七〇一〇一九五
愛知県日進市岩崎町
阿良池一二
愛知学院大学文学部内
電話(〇五六一)
七三一一二二(代)
(内線一八七五)